

梅堯臣詩研究—慶曆後期を視座として—
(要旨)

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号：D 1 6 6 4 3 8
氏 名：大井 さき

本論文は北宋・梅堯臣（1002-60）の詩について、「慶曆後期」を視座として個々の作品に残された創作上の試みの跡をたどることにより、その詩風が形成されていく過程を可能な限り具体的に示そうとしたものである。

梅堯臣は、従来詩にほとんど詠じられることのなかった事物を盛んに詩に取り入れたことで知られる。その目は虱や蚯蚓のような、身近で微小な存在にまで及ぶ。ただ奇抜な対象を取り上げただけでなく、対象の通常あまり意識されない側面に目をつけ、言葉を縦横に駆使して対象のおもしろさを引き出そうとする。こうした物の見方、表し方に魅力を感じ、この詩人が詩作を行う姿をより詳細に、具体的に知りたいと考えた。

題材を選び取る範囲を拡張し、日常生活に密着させていく姿勢は、梅堯臣の詩に特徴的なものであると同時に、宋代の詩の先駆けとなるものとされる。梅堯臣詩の特徴や歴史的な位置づけ、背景にある創作理念については従来考察が重ねられており、詩人の理念に対応し、かつ作品として優れたものが繰り返し取り上げられてきた。しかし、創作の中で行われた個別的、具体的な実践、あるいは理念との関わりが見出せない創作については、未だ十分に研究されているとは言えない。個々の実作に基づき、梅堯臣が独自の詩風を獲得するまでの経過についてさらに詳しく追求していく必要がある。

本論文が軸とする「慶曆後期」、すなわち仁宗の慶曆年間（1041-48）後半の五年間は、梅堯臣の生涯の詩作の中で特別な意味を持つと思われる。先行研究ではこの時期について、詩人の妻の死（慶曆四年）をきっかけとして、日常生活の中の事物を詠じる傾向、従来詩の題材とならなかったものを取り上げる傾向が顕著になったとする。また北宋詩の大きな流れの中でも、新時代の詩風が現れ始める時期として、やはり慶曆年間がひとつの転換点と見なされる。梅堯臣自身の詩風とともに、宋の新たな詩風が形成されていく過程において注目すべき時期と言えそうである。ただし諸論の言説は文学全体の変遷を追い、あるいは梅堯臣詩を概括的に論じる中でなされたものであり、変化の細部は未だ明らかでない。個人レベルの詩作の現場における個々の創作活動に目を向けることで、大きな流れを生み出していく契機や過程がより具体的に、詳細に明らかにできると考える。そこで本研究では、慶曆後期を視座として、梅堯臣の物の見方、とらえ方、表し方の変遷をたどろうと試みた。

本論文は三部、七章の構成で、梅堯臣の詩風の変遷を考察する。

第一部では慶曆後期の詩の主題や表現に見られる質的な変化について考える。第一章では研究全体の基礎固めとして、慶曆後期が梅堯臣詩の特徴およびその形成過程を考える上で確かに注目に値する時期であることを確認した。上に触れた先行研究では慶曆後期とそれ以前の時期との客観的な比較がなされていなかったためである。作品数の増加と詩人の生活環境の変化からは、「慶曆後期」という五年間をひとつのまとまった時期として研究対象とすることの妥当性を示すことができる。さらに慶曆後期には、従来詩に詠じられてこなかった事物を、比喩や象徴としてではなく、自身の日常生活の中の存在としてありのまま写し取るようになる。量の増加のみでなく、描写のあり方という質的な面で確実な変化が生じているのであり、しかもそれは描写対象を私生活に引きつけていくという、梅堯

臣詩の本質に関わる変化であった。

梅堯臣の詩風が慶暦後期に間違いなく変化していることがわかったので、第二章と第三章では慶暦後期に顕著となる個々の現象について具体的に考察を進めた。第二章では詩の主題に関する試みについて論じる。梅堯臣が初めて詩の領域に持ち込んだとされる「虱」という題材に着目し、慶暦後期に虱を詠じた三首の詩を分析した。三首はそれぞれ異なる手法で対象を描き出しており、新たな題材を詩の領域に持ち込むにあたり、詩であることをどのように活かし、詩としてどのように優れたものにするかを様々に工夫した跡が読み取れる。この試行錯誤が梅堯臣にとって、詩の本質を見直し、物の見方を変える契機となった可能性があることを指摘した。

第三章では表現面での試みについて論じる。慶暦後期に対句を伴わない詩が明らかに増加する点に着目し、近体詩と古体詩それぞれについて対句表現の用い方を分析した。慶暦後期には、近体詩の中で対応関係を緩やかにした特殊な対句を作るようになる。同時に、少数ながら古体詩において、平仄の制約を受けないからこそ可能と言えるような極めて精巧な対句を作る。近体詩、古体詩のいずれからも、「規則」という既存の型を継承・利用しつつ、そこから逸脱して詩の限界に挑んでいこうという姿勢が読み取れる。

以上の考察により、「主題の拡張」と「表現の逸脱」という二つの試みについて、実践の過程、及びその背景にある創作意識が部分的ながら明らかになった。いずれも根本には陳腐なものを避け、斬新さを追求していく姿勢がある。慶暦後期は新しい詩を作り出そうという意欲が強く現れだした時期だったと言える。

こうした慶暦後期の試みを支え、後押ししたと考えられるのが、この時期の詩作の場である。第二部では詩人の対人関係にも慶暦後期に変化が生じている点に着目し、他の詩人との創作が梅堯臣の詩風を変化させる要因となった可能性について論証を行う。第四章では複数の詩人が短い詩句を繋いで作る聯句を手がかりとして、詩人同士のやり取りの過程をたどった。慶暦後期の作とそれ以前の作とでは句を繋ぐ姿勢が大きく異なり、慶暦後期の作には詩作を共にする相手と技量を競い合おうという意識が強く現れる。梅堯臣はしばしば特殊な表現を作って相手の意表を突こうとし、あるいは相手の技巧に対抗しようとして自分でも意図しなかったであろう表現を生み出している。さらに詩作上の駆け引きの中で通常は詩の対象とされないような日常生活の細部にまで筆を及ぼしている。詩を共有する相手の存在、相手に対する意識が斬新な表現を生み出す契機となっていることが確認できた。

詩の応酬と表現の変化との関わりが明らかになったので、第五章では慶暦後期の応酬全体を対象に、対人関係が梅堯臣の詩風を変化させた可能性を再検討した。慶暦後期、梅堯臣は若者たちを相手に詩を作るという場を得た。彼らは梅堯臣にとって共に詩を語らうに足る仲間であり、たびたび斬新な主題を提供して詩作を求めてくる、斬新な創作の原動力となる存在だった。彼らとの具体的な応酬からは、場の気楽な雰囲気や唱和という制限が梅堯臣詩の表現をより自由なものにし、その詩風を変化させる一因となったことがうかがえる。

以上から、慶暦後期に詩風が変化した要因のひとつとして、従来指摘されてきた妻謝氏の死のほかに、詩作を共にする他の詩人たちの存在があったことを指摘した。

第三部では慶暦後期を経た後、すなわち皇祐元年（1049）以降の展開を概観することで、慶暦後期の詩作活動が梅堯臣の生涯の創作の中でもつ意味を再検討した。第六章では皇祐以降の創作のうち、主題が伝統へと「回帰」したかのように見えるものを取り上げて分析した。皇祐以降の梅堯臣は、「雪」などの古来うたい継がれてきた題材を繰り返し詩作の対象とする。既存の枠からの逸脱を試みた慶暦後期の詩作と表面的には異なるようだが、作中には斬新な表現を追求する姿勢を見出すことができ、根本の姿勢は変わっていないことがわかる。慶暦後期の試みが引き継がれつつ、斬新さを求める方法に新たな要素が加わっていることを指摘した。

第七章では慶暦後期に顕著になった特徴が梅堯臣詩の中で「成熟」していく過程を追った。「日常生活の細部を詠じる」詩の一例として、家族を描く詩を取り上げる。家族をうたうという営みは慶暦後期に「在りし日」の妻を描く中で梅堯臣詩に定着していき、皇祐以降には詩を斬新なものとするために用いられるようになる。目的だったものが方法へと転じたのである。先行作品のイメージを利用して読者を誘導し、家族の姿を物語のように「語る」ことで定型化した展開を覆す。家族を個別的、具体的に描き出すことで表現も新奇なものとなり、そうした詩作を繰り返すうちに、次第に家族をうたうこと自体が詩作の目的となっていく、方法が目的へと転じるという展開を示した。

慶暦後期の梅堯臣は従来の詩のあり方から離れていくような詩作を繰り返し試みたのに対し、皇祐以降には伝統的な題材や表現を避けることなく活用するようになる。慶暦後期に見出した新たな詩の作り方を、伝統的な詩の主題や表現と有機的に結び付けていくことによって、斬新かつ中身の豊かな詩へと練り上げていったのだと考えられる。

以上の考察を踏まえると、慶暦後期は梅堯臣詩の中で次のように位置づけられる。慶暦後期の創作は詩の伝統から離れることで新しい詩の領域を切り拓こうとするものであった。新たな主題に目を向けるきっかけは、妻の死という個人的な出来事にあっただけでなく、新しい創作を許す環境もこの時期に整っており、それが梅堯臣の試みを後押しした。外的、内的な要因から、従来とは異なる詩を追求する試みを積極的に繰り返し、新しさの幅を広げた時期であったと言える。皇祐以降には、その新しさと伝統とを融合させながら、更に多様な表現を試みる。その中で梅堯臣は自身の作風を完成させ、結果的に宋代の詩全体を方向付けていったようである。慶暦後期は、梅堯臣詩を構成する要素のうち、最も斬新な部分を手に入れるために必要不可欠な、試行錯誤の時期であった。